

新世紀ミュージアム

博物館の展示は時代を反映する。このことは、展示の内容が世界情勢を投影するという意味にとどまるものではない。国家の意味が問い直されている現代、博物館の使命もあらためて問われている。ドイツの博物館の試みを紹介する。



MEKアルニムアレー入口 (2017年)
© Staatliche Museen zu Berlin, Museum Europäischer Kulturen / David von Becker

ヨーロッパ諸文化博物館は、一九九九年に設立された。通称は頭文字をとってMEK(メック)という。MEKは、プロイセン文化財ヘルリン国立博物館群の一翼を担う博物館である。

ホワイエと「時事ショーウィンドウ」

重厚な木製の扉をあけると、談話室のような空間が広がる。左手にクローク兼受付があり、前方奥が左右に分かれて展示場につづく。いくつかのテーブルが配されていて、来館者が待ち合わせに使うことも、書き物をするのもできる。この居心地のいいホワイエ

に、「時事ショーウィンドウ」コーナーもある。現代社会のできごとと関連の深い収蔵物を一点選んで展示するもので、時事問題に歴史のパススペクティヴを与えることを意図している。このコーナーは二〇一四年、ウクライナとロシアのクリミア半島危機を契機につくられた。

二〇一五年には「HIV、AIDS犠牲者の記憶」として、ベルリンのエイズ犠牲者に関する展示をした。そのときホワイエには、エイズ・メモリアル・キルト運動のキルトが飾られ、企画展示場ではパッチワークのワークショップが開催されていた。

二〇一八年一月現在は「エリス島(アメリカ合衆国)——希望の島、涙の島」と題した写真が展示されている。移民・難民を扱って特に大きな反響のあった企画展「ホーム——難民生活への洞察」(二〇一六年七月〜二〇一七年七月)が終了したのちも、社会的関心の高いこ

第一は、現代社会を民族誌的に描く企画展で、カメラマンとの共同制作などがある。前掲の「ホーム——難民生活への洞察」は、難民の芸術家と博物館スタッフが協力して展示をつくった。

アルバニア、アフガニスタン、ボスニア、イラク、コンボ、パキスタン、シリア出身の芸術家たちがKUNSTASJYL(ドイツ語で「芸術アジール」というグループを結成し、難民経験をテーマに制作した作品や証言映像を展示した。参加した芸術家の多くはベルリン、スパンダウの難民収容施設に居住しているか、居住した経験がある人びとだった。会期終盤には、日曜日の午後を無



MEKのスタッフ (2015年当時)
© Staatliche Museen zu Berlin, Museum Europäischer Kulturen / Ute Franz-Scarciglia

料観覧とし、作者が自らの展示物について来館者と対話する機会を設けた。

第二のカテゴリーは、機織や刺繍、キルトなど「衣」にかかわる展示である。会期中は多くのワークショップが開催され、MEKの企画に市民が参加する重要な機会になっている。最新の「ウーラー00パーセント」(二〇一七年一月〜二〇一九年六月)は、羊飼いの生活から魔法の絨毯まで、毛糸つくりの工程や商品生産を含めて展示する。

第三のカテゴリーは、MEKの収蔵資料を公開するものである。毎年二月に開催されるクリスマス企画展は、根強いファンをもつ。

沿革

ところで、MEKの設立は一九九九年であるが、その前身の歴史をたどると一八八九年にルドルフ・ヴィルヒョウが設立した「ドイツ民俗衣装と家内生産のための博物館」に起源をもつ。設立当初からアドルフ・バステリアンが初代館長を務め、フランツ・ポアズも渡米前に身をおいていた民族学博物館(一八七三年設立)と深い関係をもっていた。のちに「ドイツ民俗学博物館」と改称し、ベルリンが東西に分断された冷戦時代は、東西ふたつの民俗学博

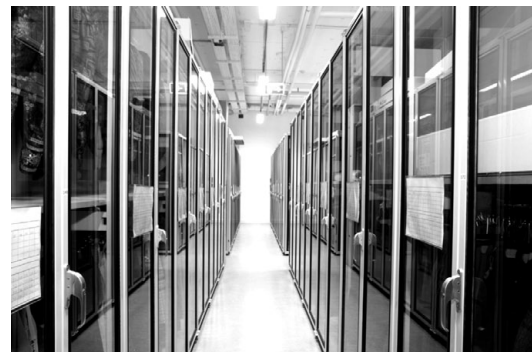
のテーマを継続し、歴史的に展開したものである。

常設展と企画展

ホワイエ奥を右に進むと常設展示場、左に進むと企画展示場である。常設展は、「文化の接触」をテーマとして、商売、旅行、移民、戦争などを介してさまざまな文化が出会い、混じり合って今日のヨーロッパが成っていることを示す。企画展は、常時複数開催されている。期間を区切って開催される企画展は、博物館スタッフが館外のエキスパートと協力してつくることが多い。およそ三つのカテゴリーでとらえることができる。



ホワイエに飾られたエイズ・メモリアル・キルト運動のキルト (2015年)



MEKのテキスタイル収蔵庫
© Staatliche Museen zu Berlin, Museum Europäischer Kulturen / Ute Franz-Scarciglia

博物館が存在した。東西ベルリンの再統一を受けて一九九二年に東西の民俗学博物館が統合される。注目すべきなのはその後である。一九九九年、民俗学博物館は、民族学博物館の世界の諸民族文化コレクションのうちのヨーロッパ・コレクションを引き継ぎ、従来の民俗学博物館のコレクションと合わせて、あらたにMEKとしてスタートした。MEKが二〇世紀の民俗学博物館と異なるのは、それがドイツという国民国家の文化に関する博物館ではなく、複数形の「ヨーロッパ諸文化」の博物館だということである。それはドイツが二〇世紀にたどった歴史やその後の世界の秩序を投影するものである。